

書評

Mark Hewitson

History and Causality (Palgrave Macmillan, 2015)

タイトルが示すように、本書は歴史学における因果性に関する研究書である。因果性は近年の科学哲学におけるホットなトピックとなっており、生物科学にとどまらず社会科学までも視野に入れた議論が行われている。その影響で、経済学、政治学、社会学などの社会科学の方法論において、因果性については哲学者も個別科学者も交えた活発な議論が行われている。その一方で近年の歴史理論 (historical theory) においては、因果性が検討の俎上に上ることはほとんどない。それどころか、言語論的展開の影響や人類学の影響をうけて、言説史や文化史が大流行し、因果関係に関わる社会構造は顧みられなくなりつつあるという。このような中において、歴史研究の理論の中に因果性を適切に位置づけることが本書の目論むところである。

著者によれば、因果性が歴史と対立するとされるのは今に始まったことではない。社会科学的手法を歴史研究に持ち込もうとする者たちと、政治史に始まる伝統的な研究方法を正統視する者たちの対立は 19 世紀にはすでに見られる。マイケル・オークショットはカーの『歴史とは何か』への書評において、歴史は個別的な事象を扱う個性記述的 (ideographic) 研究であり、因果性を持ち込むと歴史の複雑さが失われてしまうと主張しているが、これはそのような対立の顕著な一例である。社会科学で用いられる因果的説明と対立する歴史研究の方法として物語的歴史叙述や文化の中のコンテキストを重視する厚い記述が持ち出されるのは、長い歴史を持つ対立の延長であると著者は言う。

著者自身は、因果性を拒絶することに反論しつつも、伝統的な対立のどちらの立場にも与さない。むしろ、両者をうまく調停する立場として、マックス・ヴェーバーと、哲学者アーサー・ダントーの主張をよりどころとする。ダントーが歴史理論における「物語」の流行の火付け役の一人であることを考えると、これは少々意外に思われるかもしれない。彼らによれば、歴史記述は歴史家の問いかけに基づいて証拠や事実を取捨選択することによってなされる。例えば、車のボディにへこみが生じているという記述は、へこみのない状態という先行する状態を必然的に指示し、なぜこのような変化が生じたのかという問いを生じさせる。その一方で、ある事実を物語に含めるかは、後続の出来事との関係で、問いに答える際の重要性によって判断されることになる。

ここでは一見そうは見えずとも、原因の分析が行われていると見ることができる。

このような立場に立つと、一方で、因果性を排除した記述や物語を認めるわけにはいかなくなる。そのようなものが存在するとすれば、問いによる支えを持たない断片的記述の集まりとなり、取捨選択の規準となる問いが無い以上、なぜそのような記述が行われているのかに関する正当化を欠くことになる。記述や物語と因果性を対置させる歴史理論家は、歴史研究における問いの重要性、そして問いに基づく取捨選択の重要性を見落としているというのが著者の診断である。他方で、著者は社会科学的方法に必ずしも与するわけではない。合理的選択理論や機能主義社会学による説明のような構造による行為の説明が、モデルに都合の良い部分のみに注目した取捨選択を行い、行為の動機の多様性を見落としてしまう可能性を指摘している。

本書の主張の概要は少々乱暴ながら以上のように要約できるだろう。この主張は決して目新しいものに映らないかもしれないが、本書の際立った特徴は、この主張に照らして、現在の歴史理論の非常に手広い検討を行っている点にある。ポストモダニズムによる歴史学批判とそれに対する歴史家の応答に始まり、インテレクチュアルヒストリーにおけるケンブリッジ学派を始めとする諸潮流の方法論、社会史において隆盛してきた文化史、クリフォード・ギアツの提唱する厚い記述、その他に歴史家による歴史理論、社会学における行為の理論など、数え上げていくときりがない程である。これら現在の歴史理論の包括的検討の過程を、章立てに沿ってごく簡単に紹介したい。

1章は、ポストモダニズムによる歴史学への批判と、歴史家による応答を概観し、その中で因果性が忘れ去られてきた経緯を検討している。歴史学へのポストモダニズムからの批判においてジャック・デリダの議論がしばしば参照されるが、筆者によればその要点は、言語表現にはその本来の意味があり、その意味にたどり着くことが言語表現の理解であるという見方への批判にあるという。デリダのこのような見方に反論する歴史家たちは、テキストの著者の意図やテキストの外部にあった事実を復権することに熱中するようになり、因果性の問題に注意を払わなくなった。例えば、ジョイス・アプルビー、リン・ハントらは、物語・事実・意図といった話題を盛んに検討する一方で、因果性の問題にはほとんど触れていない¹。他に、ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』やケンブリッジ学派などインテレクチュアルヒストリーにおける潮流が紹介され、そこで因果の問題が十分に検討されていないことが論じられている。

2章においては、社会史において因果性への関心が後景に退いていく経緯が検討さ

¹ Appleby, J., Hunt, L., and Jacob, M. (1994). *Telling the truth about history*. WW Norton & Company.

れている。社会史は元来、生産様式と資本の集積の関係といった社会構造と社会的過程の関係を扱うものであった。事実、アメリカの歴史社会学者チャールズ・ティリーに代表される1970年代までの社会構造史家はデュルケーム、ウェーバー、マルクスなど19世紀の社会学者の理論を批判的に継承しつつ、比較分析により因果的な過程を構築することを提唱していた。しかしながら、言語論的展開の影響と文化史の台頭により、社会史家の関心は言説の秩序、アイデンティティ・ポリティクスといった主題に移っていき、社会構造への関心が急速に後退していく。その中で、因果的説明の問題が歴史家の関心を引かなくなったと論じる。ただし、社会史家の中でも、産業革命期を扱っているステッドマン・ジョーンズなど一部の歴史家は、因果的説明の問題の重要性を自覚し、社会構造の重要性を見逃さず議論を行っているとして好意的に紹介されている。

3章においては、このように因果の問題を歴史理論から追いやろうとする議論の問題が指摘されている。因果的説明を歴史研究から遠ざける議論は今に始まったものではなく、前述したように、哲学者オークショットはカーが歴史研究における因果の問題を重要視することを批判している。オークショットによれば、因果を強調した歴史研究は歴史の複雑さや個性が失われてしまうという。しかしながら、著者はカーの側に肩入れする。オークショットは問いの重要さ、すなわち、問いに導かれた証拠や出来事を選択を経ない限り、歴史における過程など認識することができないということを見落としているという。歴史の過程が複雑であることはカーも百も承知だったのであり、だからこそ単純化の過程で原因がどのように重みづけされるかに関心があったのであるというわけである。

4章においては、因果関係に関する主張がどのように正当化されるかに関する、著者自身の見解が示される。冒頭で確認したように、問いに対して、証拠や事実を取捨選択しながら時系列を構築することによって歴史家は答えを与えると著者は考える。このようなわけで、歴史研究は不可避免的に原因の分析となるのであり、原因の重要性に関する判断こそが歴史研究の核心をなすと主張する。この点については、ウェーバーによる検討をもとにした、哲学者ポール・リクルールの議論が参照されている。

5章と6章では、原因の重要性の判断が歴史研究の核にあるという主張をうけ、その判断がどのように正当化されるかを検討している。5章は、原因の探究においては、個人の行為と社会構造のどちらか一方ではなく、両者の交差を考慮すべきだと主張している。特に個人の行為の内的動機のみ注目する行為の説明の理論を批判し、個人の行為の原因は内的な視点と外的な視点から検討されるべきだと主張する。また、

因果関係の検討には異なる地域や時代の比較から原因を割り出す比較法が最も有効な方法であるとして、比較法に基づく研究をいくつか好意的に紹介している。6章においては、社会学における様々な行為の理論が検討されるが、特に注目すべきは、人類学者クリフォード・ギアツが民族誌の手法として提唱する厚い記述に対する批判的なコメントである。厚い記述は人々の行為をその文化におけるコンテクストまで含めて記述することとされる。その例としてバリ島の闘鶏に関する民族誌が有名である。だが、これを歴史研究のお手本と考えるのは考え物であると論じる。というのも、なぜそのような実践が生まれたのか、なぜバリ島の闘鶏は他の文化の闘鶏と異なるのかといった歴史学が扱うはずの重要な疑問が残されてしまうからである。

以上、駆け足でごく簡単に各章の内容を概観してきた。紹介できなかった論点は、ブローデル『地中海』と物語の関係に関わる点や、Sewell(2005)への批判など、多数残されてしまっているのだが、紙幅の関係上、これ以上詳しい紹介は望めない²。本書に不満な点の一つ述べるとするならば、様々な歴史学方法論が批判的検討に晒される一方で、著者自身が具体的にどのような歴史研究の実践を支持しているのかが見えにくい点は難点と言えるかもしれない。しかしながら、著者の専門である歴史学の実践、理論に留まらず、隣接する社会科学分野や社会科学の哲学へを広く見据え、哲学的な議論をこなしながらも、近年の歴史実践や歴史理論の文脈を踏まえた議論となっている。本書の主張は過去になされてきた主張の繰り返しではあるものの、忘れられていた因果性の問題を再び位置づけ直すことによって現在の歴史理論に重要な問題提起を果たしていると思われる。とりわけ、言語論的展開以降の歴史理論において、取捨選択の規準として研究者の持つ問いの重要性が見失われていたという指摘と、原因の重要性に関する判断が歴史研究の重要な部分を占めているという指摘、冒頭で見たモデルや社会学理論に基づく説明には証拠や事実の取捨選択に弱点を持つという指摘などは、伝統的な方法と、近年新たな形で再び力を持ちつつある定量的な方法との関係を考える上でも重要な論点となりうるだろう。扱う話題のが非常に広いため、通読することは楽ではないかもしれないが、関心のある話題に関連する章だけでも、歴史理論、歴史の哲学に関心をお持ちの方には是非とも一読いただきたい一冊である。

(苗村弘太郎, 京都大学大学院文学研究科博士後期課程 kou.namura@gmail.com)

² Sewell Jr, W. H. (2005). *Logics of history: Social theory and social transformation*. University of Chicago Press.